

# す だ せ い た ろ う 須田誠太郎

利根川<sup>ちすい</sup>治水の父 潮来市



(『ふるさと牛堀』より転載)

明治14年(1881) - 昭和44年(1969)。行方郡香澄村〔潮来市〕生まれ。小学校卒業後、鹿島町〔鹿嶋市〕の吉川塾で漢学を修め、上京して明治大学に入学。卒業後、香澄村農友団や実業同志会を結成し、指導者として活躍する。代議士小久保喜七のもとに通い、利根川・霞ヶ浦・北浦などの治水事業に取り組む。地元の人から「治水の父」と親しまれ、大正7年(1918)香澄村村長に就任。昭和2年(1927)には県会議員に当選、同30年(1955)には牛堀町長となるなど地方自治に功績をあげる。昭和31年(1956)に牛堀町名誉町民・藍綬褒章受賞、同43年(1968)には県知事より明治百年記念特別功績者として表彰されるなど数々の表彰を受ける。

須田誠太郎は、行方郡香澄村〔潮来市〕の旧家須田家の長男として生まれました。須田家は、代々庄屋を務め、父、幹三も県議会副議長など数多くの役職を歴任するとともに常陸利根川の改修に力を尽くしました。

誠太郎は、地元の尋常小学校、高等小学校を卒業すると、鹿島町〔鹿嶋市〕にあった私塾で漢学や歴史を学びました。

(もっともっと勉強して、社会に役立つ人間になりたい。それには、東京に出て勉強することだ。)

こう考えた誠太郎は、東京で勉強したいことを父に打ち明けますが、父に猛反対されます。そこで、誠太郎は明治32年(1899)に、ひそかに東京に出て、そこから何度も父に許しを乞います。このひたむきな情熱はついに父を動かし、祖母のとりなしもあって、やっとのことで許しをもらいます。父はその時、誠太郎に対し、はなむけとして「心広躰胖」<心広くして体ゆたかなり>の四字を贈って、励ましたそうです。この言葉は、誠太郎の生涯の座右の銘となりました。

東京に落ち着いた誠太郎は、大成中学校の2年に編入し、当時問題となっていた足尾銅毒<sup>あしお</sup>に関心をもち、田中正造が情熱をかけて鉱毒問題に取り組んでいることに感激し、正造の運動に参加することになりました。この運動での経験によって、後の社会運動家・政治家としての素地がつくられたのでしょ

う。その後、誠太郎は満州〔中国の東北部〕での活躍を夢見ていました。それが実現しようとしていた矢先のことです。明治43年(1910)8月6日から14日にかけて、茨城県に豪雨が襲い、利根川が大洪水となったのです。堤防決壊が66か所におよび、県内の死者が25人にも達しま



常陸利根川(北利根川)の流れ

した。この水害のために須田家も床上浸水が2か月余りに及びました。誠太郎の母はもとも心臓が弱い方でしたので、この洪水の中での生活の疲労のため、11月に死去してしまうという悲劇がおきたのです。この突然の母の死は、誠太郎を本格的に治水事業に向かわせるきっかけとなりました。

(母の死は本当に無念なことだ。これも洪水のせいだ。よし、洪水と戦おう。そして、洪水がおこらない世の中にしよう。それが自分の生涯の仕事であり、母の供養のためにもやりとげよう。)

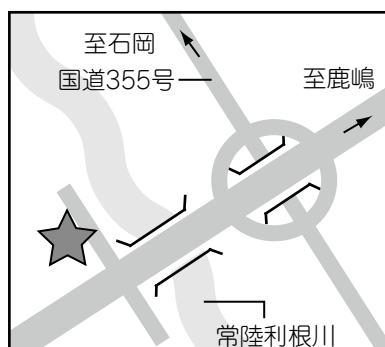
誠太郎は、一生を治水対策にささげようと決心し、治水に関心があり父とも親交のあった代議士の小久保喜七に相談し、その紹介によって新聞記者になります。そして、新聞記者の肩書きを最大限に利用し、利根川治水の具体策を政府に働きかけ、利根川の堤防、横利根川の閘門などを完成させました。その後、誠太郎は県会議員となりますが、なお洪水の被害は絶えなかったため、私財を使い果たしてまで、水害対策に専念します。戦争で一時中断はありましたが、川の底をさらって深くしたり、川幅を広くして流れをよくしたり、堤防を高くして人家を水から守る工事をしたりして、利根川治水対策に努力しました。また、北浦へ神宮橋、利根川へ水郷大橋、常陸利根川へ北利根橋を架け、牛堀地方の道路を整えることにも力を尽くしました。まさに治水の父として、一身を投げうっての活躍でした。

## ゆがりのスポットに行ってみよう

### 須田誠太郎翁治水功労顕彰碑

所在地 潮来市永山 43 - 1

内容 この記念碑は、須田誠太郎の治水事業を称えるために、誠太郎の業績を刻み、昭和41年(1966)に建てられました。



## おもな 参考文献

『特別功績者小伝』(茨城県・1969)

『茨城の先人たち』(茨城県地域学習資料研究会・1983)